

## 鈍叟・況翁・圓了 越後長岡の名望家高橋九郎を交点に

著者	松本 剣志郎
著者別名	matsumoto kenshiro
雑誌名	井上円了センター年報
号	23
ページ	59-81
発行年	2014-09-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00006906/">http://id.nii.ac.jp/1060/00006906/</a>

# 鈍叟・況翁・圓了

越後長岡の名望家高橋九郎を交点に

松本剣志郎 *matsumoto kenshiro*

## 一

井上圓了の生涯は漢詩とともにあった。明治五年（一八七二）、圓了十五歳の頃からの詩稿がいまに伝わり、以後、日記代わりに膨大な数の漢詩を賦した。晩年の圓了はこう言っている。「余、いまだ詩味を了せず、したがって詩人の詩を解せず、すべて自己流の俗調もって得意としておる」(1)。「もとより詩人の詩にあらずして妖怪問屋の詩」(2)。また自らの詩作を「馬鳴鹿吟」と呼んでいたという(3)。

詩の巧拙は問うところではない。漢詩の自然な創作が、圓了の習慣となっている。その由来はどこに求められるのか。

圓了は安政五年（一八五八）に越後長岡の真宗寺院に生まれた。東京大学文学部を卒業後、明治二十年、圓了三十歳にして哲学館を創立した。東洋大学の前身である。「哲学専修」の学校として、「晩学ニシテ速成ヲ求ムル者、貧困ニシテ資力ニ乏キ者、洋語ニ通セスシテ原書ヲ解セサル者等」に開かれた学校(4)として、その意義少なしとしない。圓了は、この学校の建設や運営のための資金を募り、全国各地を講演して廻った。このとき寄付

の謝礼に圓了は揮毫した。現在に遺るおびただしい数の書のほとんどは漢詩である。

終生、自伝をものするを潔しとしなかった圓了も、若き頃には自らの履歴を整理し、名を著してからは述作のなかで折々来歴の一端を語っている。ときに圓了五十五歳、『活佛教』（大正元年）を著すにあたり、「信仰の告白に必需の条件」としてつぎのように記す〔5〕。

余は安政の末年、越後国長岡近在なる浦と名くる地に生れしを以て、雅号を甫水と定めたり、父は真宗門下大谷派の寺院に住職たりしを以て余の春秋十歳までは宗門の教育を受けたりしが、会々戊辰の戦乱となり、王政維新となり、時勢一変したりし結果、余の教育の方針も一変し、仏典を抛ちて儒林に遊ぶに至り、石黒忠徳氏（男爵）<sup>（マツ）</sup>の家塾にあること約二年、木村鈍叟氏（旧長岡藩儒者）の講義を聴くこと約四年、其間漢学を専修したりき、明治六年より英学に転じ、同じく七年より十年まで長岡洋学校にありて教授を受け、併せて教鞭を執りたり（後略）

生家慈光寺における宗門の家庭教育を経たのち、圓了はまず石黒忠恵（況翁）<sup>（タノリ）</sup>に就き、ついで木村鈍叟に習った。明治十八年に記した履歴は年月に詳しく「明治元年三月ヨリ同二年四月迄、同縣下片貝村匠士石黒忠徳ニ從テ支那学ノ素読ヲ正シ、洋算ノ階梯ヲ授カル、同二年八月ヨリ五年十二月迄、同縣下長岡旧藩木村鈍翁に就テ支那学の意義ヲ問フ」とある〔6〕。明治元年から五年まで、十一歳から十五歳の圓了が学んだのは、漢学を中心とした近世来の学問体系であった。圓了の漢詩のルーツはここにある。

明治初年の越後長岡近在における、木村鈍叟と石黒況翁と井上圓了の結びつきを示す史料は数少ない。そのよ

うななか、同地でこの三者と交わり、ときにその活動を支援した人物がいる。高橋九郎である。

高橋家は圓了の育った浦村の隣村、宮川新田の豪農で、近世後期には長岡藩西組の割元を勤めた家柄である<sup>(7)</sup>。なにより圓了生家、慈光寺の檀家惣代であった。その六代目当主九郎は嘉永三年（一八五〇）に生まれ、大正十一年（一九二二）に没した<sup>(8)</sup>。長じてのちの政治的活動の一部を拾い上げれば、明治六年に戸長、明治十一年に新潟県十六大区小六区の副大区長、明治二十七年に衆議院議員に初当選（任期はひと月たらず）、明治三十一年から三十五年まで再び衆議院議員、明治四十一年から四十五年まで来迎寺村長。

地元の利害を代表して活動する地方名望家と言つてよい。九郎は幼少より寺子屋に通い、元治元年（一八六四）十五歳の頃より明治二年（一八六九）までは片貝村の丸山貝陵（？一八六八）の塾、耕読堂で学んだ。貝陵は、江戸で萩原緑野に学んだ儒学者である。耕読堂には石黒忠恵も一時身を置き、助教の任を勤めていた<sup>(9)</sup>。貝陵に親炙した九郎は、字を子信、号を蘭溪と名づけてもらっている<sup>(10)</sup>。貝陵の没後、明治三年から同六年まで、九郎は木村鈍叟に就いた。九郎と圓了は鈍叟のもとで同時期に学んでいたことになる。

かくして鈍叟・況翁・圓了の経系に、九郎の緯系が繋がった。

## 二

木村鈍叟、生没年不詳。文化年間（一八〇四一八）頃に生を享けたものと推測される。名を恒、字は子一、通称誠一郎。号に竹軒および壽菴が確認される<sup>(11)</sup>。鈍叟あるいは鈍翁は、晩年に使用したものとみられる<sup>(12)</sup>。木村家は、代々長岡藩医を勤める家で、家禄は二百石であったという。鈍叟その人について最初に知りうるのは、天保二年（一八三一）に藩中より選抜されて、高野松陰（一八一一四九）、山田到処（一八一六九六）

とともに江戸に遊学しているということである<sup>(13)</sup>。三人は同世代であつたとみてよからう。それぞれ江戸での師を別にし、松陰は佐藤一斎に、到处は古賀侗庵に就き、鈍叟は折衷学派の朝川善庵の門をくぐつた。江戸で学問に励み、幾多の文人たちと交流をもつたものと思われる。弘化二年（一八四五）刊行の『越後人物志』は、詩文に巧みな者として「長岡藩竹軒」の名を挙げており、その才能のひろく知れわたつていたことを示す。嘉永二年には、病没した高野松陰のあとを継いで、山田到处とともに藩校崇徳館の都講となつたという。だがのちに鈍叟は郡奉行に転じ、藩校を離れた。この間、河井継之助も鈍叟に就いて学んだという<sup>(14)</sup>。

維新に際して鈍叟が如何なる立場にあつて、これにどう処したかは皆目知れない。ただ長岡落城により行き場を失つたことは確かであろう。それが如何なる経緯か、浦村の慈光寺に辿り着くこととなる。あるいは郡奉行在任中に長岡藩西組割元の高橋九郎右衛門（繁太郎則政、九郎の父）と相識の間柄となり、これの勧めで来村したことも大いに考えられることである。維新後、在村において黎明期の近代学校教育を牽引し、下支えしたのは鈍叟のような士族たちであつた。鈍叟を迎えて慈光寺に開かれた塾のことを、圓了はいくつかの漢詩に詠み込んでいる<sup>(15)</sup>。

#### 春日送友人

友人名登岸

郷名并柳

遙出柳郷到浦郷

遙かに柳郷を出で 浦郷に到る

春中共学慈光庠

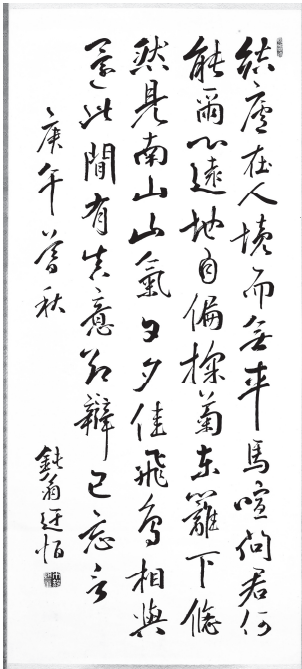
春中 共に学びしは 慈光庠

堪驚今日分襟去 驚くに堪えん 今日 襟を分かちて去る  
空送信濃江水傍 空しく送る 信濃 江水の傍ら

明治五年の詩。韻目は下平七陽。慈光庠の「庠」<sup>しやう</sup>は、学校、郷学の意。共に学んだ友人を信濃川に見送る別れの詩である。

「慈覺雜吟」二首<sup>16</sup>によれば、塾には慶次郎と徳太郎の両教師がおり、近在の二十五、六名の生徒が通った。授業の内容は「午前共誦支那語、午後相傳英米詞」。午前は漢学、午後には英語を学んだ。「英米詞」が加わっているところに、鈍叟の進取の気性が感じられ、また曲がりなりにも英語を教授できる人物が、明治初年の長岡近在にいたことに我々はもつと注目してよからう。かかる塾に圓了と九郎とは学んだ。

さて、高橋家には四点の鈍叟の書が伝来した。まずは陶淵明の「飲酒其五」（五言排律）を書いたものである<sup>17</sup>。



木村鈍叟書

結廬在人境	廬を結んで人境に在り
而無車馬喧	而も車馬の喧 <sup>かまびす</sup> しき無し
問君何能爾	君に問う何ぞ能く爾 <sup>しか</sup> るやと
心遠地自偏	心遠ければ地自ずから偏なり
採菊東籬下	菊を採る東籬の下
悠然見南山	悠然として南山を見る
山氣日夕佳	山氣 日夕に佳く

飛鳥相與還

飛鳥 相與に還る

此間有真意

此の間に真意有り

欲辯已忘言

辯ぜんと欲して已に言を忘る

庚午暮秋

鈍翁迂恒

自ら職を退き、心静かに隱遁生活を送る。そのさまは古來文人の理想であつた。九句目の「此間」は本来「此中」とあるべきもの。庚午は明治三年。暮秋は陰曆九月の異稱。落款の迂恒は自称の謙辞である。迂も鈍も己をへりくだる言葉で、迂鈍といえ、世事に鈍くのろい、物の用にたたぬ人を意味する。ここに我々は北越戊辰戦争を経験した、「壽菴」（いのちながし、寿ぎの庵）木村誠一郎の失意と落魄を看取する。かつての藩内きつてのエリートが、時代の変転に自らを「無用者」として、田舎にひっそりと生きようとする心底をみるのである<sup>(18)</sup>。落款印は「木邨恒章」（白文）。関防印は「眇々兮予懷」（白文）。「眇々たり予が懷い」とは、蘇軾（蘇東坡）の前赤壁賦の一節である<sup>(19)</sup>。

於是飲酒樂甚、

是に於いて酒を飲んで楽しむこと甚だし。

扣舷而歌之、歌曰、

舷を叩いて歌う。歌に曰く、

桂櫂兮蘭槳、

「桂の櫂、蘭の槳、

擘空明兮泝流光、

空明に擘ちて 流光に泝る。

渺渺兮予懷、  
渺渺たり 予が懷い、  
望美人兮天一方  
美人を天の一方に望む」と。

左遷の地で賦された詩の一節「遙か彼方にひろがる私のおもい」に、鈍叟は如何なる想念を重ねていたのであろうか。

のこる高橋家伝来の鈍叟の書は、いずれもまくりの状態である(20)。まずは『唐詩選』より、張巡の五言律詩「聞笛」を書いたもの(21)。まくり二枚に亘っている。

岩崑試一臨  
岩崑 ちようぎよう 試みに一たび臨めば

虜騎附城陰  
虜騎 りよき 城陰に附く

不辯風塵色  
風塵の色を辯ぜず

安知天地心  
安くんぞ天地の心を知らんや

門開邊月近  
門は開けて辺月近く

戰苦陣雲深  
戦いは苦しくて陣雲深し

旦夕更樓上  
旦夕 更樓の上

遙聞横笛音  
遙かに聞く 横笛の音

庚午八月為

宮川高橋君 鈍翁



安史の乱において叛乱軍に包囲されるなか、城中の笛の音に風流を感じて作った詩。鈍叟は、一句目の「崑」を「堯」に、五句目の「門開」を「開門」と書し、「近」を脱字。六句目の「戦苦」を「苦戦」と書し、「陣」を書き落としている。

つづいて詩仙李白の周知の七言絶句「山中與幽人对酌」(22)。まくり一枚に書される。

兩人對酌山花開 兩人對酌して山花開く

一杯一杯復一杯 一杯 一杯 復た一杯

我醉欲眠卿且去 われ酔いて眠らんと欲す きみ且く去れしばら

明朝有意抱琴来 明朝 意有らば 琴を抱いて来たれ

鈍叟は、一句目と二句目を逆に書き、三句目の「我」を「吾」、「卿」を「君」と書いている。最後は人口に膾炙する『古今和歌集』四百十一番、『伊勢物語』九段の和歌。

名にしおはゝ いさことゝはん 都鳥

我思ふ人は ありやなしやと

庚午八月

無良飛計

京の都を出た在原業平が、武藏国と下総国の境、隅田川で詠んだ歌である。落款の「無良飛計」は、万葉仮名で「むらひけ」と読ませるか。「むら」は「きむら」の意なのであろう。

張巡、李白、そして業平の三点（まくり四枚）は、同寸法で同じように日に焼け、裏面には表装の痕跡が認められる。すなわち、これらは二曲一双の屏風に仕立ててあったものと思われる。李白のものに落款がないのは、業平と対になっていたからであらう。

ところで張巡と李白のものは誤字脱字が目立ち、句の順番が逆転しているなど、不確かな記憶に基づき書かれていることは明らかである。恐らくは請われて即座に書き与えたものなのであろう。ゆえに鈍叟は、翌九月に陶淵明を本腰を入れて書いた。それはこれにのみ印を捺してあることから証される。

以上、鈍叟が高橋九郎のために書いた四つの詩と歌は、いずれもよく知られたものばかり、基本中の基本である。教養として九郎に示したのであろうが、何故鈍叟は多くのなかからこれらを選んだのであろうか。九郎は二十歳、既に丸山貝陵のもとで学び、ここにあげられた詩は習得済みであつたろう。詩の作者たちの半生をみれば、隠遁者の陶淵明、孤軍奮闘して非業の死を遂げた張巡、晩年は投獄と流罪を経験する李白、「身をえうなき物」に思いなした業平。鈍叟が、自らの境遇と胸中を詩の作者らに仮託したとみるのは、深読みに過ぎようか。

高橋家には明治五年（一八七二）の鈍叟の借金証文が遺る（23）。

## 覚

一金五両也

右者借用申処実正御座候、来ル四月中無相違元利返済可致候、為其如件、

明治五申ノ

二月廿二日

木村鈍叟（印）

高橋九郎殿

御口入

生活に窮したものか、証文の字は力なく弱い。木村鈍叟のその後は杳として知れない。没年、墓所ともに不明。

### 三

況翁石黒忠恵（一八四五―一九四一）は陸軍軍医総監、貴族院勅選議員、日本赤十字社社長などとして知られる<sup>24</sup>。奥州伊達郡梁川の代官手代平野良忠の家に生まれた。甲州で幼年を過ごしたのち、江戸に出て中澤雪城（一八〇八―六六、長岡出身）に書を学ぶ。父の没後、信州中之条での生活を経て、圓了生家にほど近い越後三島郡片貝村（現小千谷市）の石黒家（伯母の家）を継いだ。文久二年（一八六二）、十八歳の頃より私塾を営み、ここに少き圓了は通った。後年、況翁はこの頃の圓了について、大雪の日にひとりだけ塾に来たこと、通塾の途中で鼻緒が切れても時間を惜しむ裸足で来たことをしばしば語っている<sup>25</sup>。

高橋家に伝わった石黒忠恵の掛軸は自作の七言絶句を書いたものである<sup>26</sup>。

君恩太渥及草廬

君恩はなはだ渥あつく 草廬に及ぶ

負暖南軒食有魚

南軒に暖を負いて 食に魚有り

終日悠然凭淨几

終日 悠然として淨几に凭る<sup>よ</sup>

読書不復要三餘

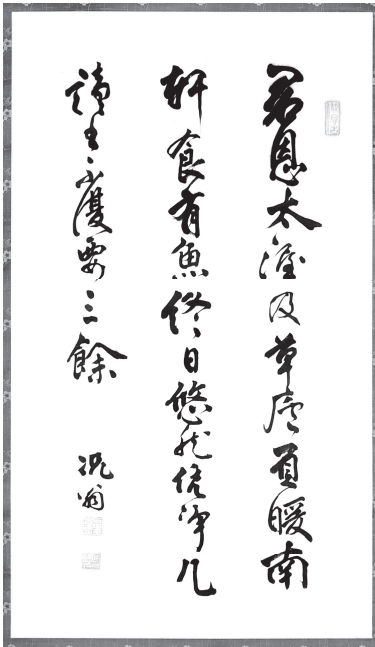
読書 また三餘を要さず

況翁

韻目は上平六魚。君恩に感謝しながら、満ち足りた悠々自適の隠居生活を送るさまが詠まれている。結句の三餘とは、三つの餘りの時間、すなわち冬は歳の餘り、夜は日の餘り、陰雨は時の餘りを指し、学問をするにはこの剩餘の時間で足りるとの意である<sup>27</sup>。読書にそのような三餘を必要としない<sup>28</sup>のだから、このとき既に

石黒は陸軍を退き、あるいは赤十字社をも退いていたのであろう。大正から昭和にかけて、石黒晩年の心持ちを詠んだ詩と推測する。

落款印は「石黒忠恵」（白文）と「況齋主人」（朱文）。関防印は「我思古人」（朱文）。「我古人を思う」は、『詩経』邶風<sup>はいふう</sup>の「緑衣」にある言葉。亡き妻の衣を抱き、故人を偲ぶ詩である。ここでの古人とは亡き妻のことだが、古来より文人たちはもつと自由に、前世に知己を求める態度を表す言葉として「我思古人」を使っ



石黒況翁書

てきた。石黒においてもそれは変わるまい。

号を況翁とすることの所以は石黒自ら記す<sup>(28)</sup>。

余十八才の時、岡本縫助<sup>(マ)</sup>殿という人に逢うた。(岡本氏の事は後に又述ぶべし) 此先生の話の内に昔ましての翁という翁がありて、何事にも頓着しない、よき事がありて人來り慶すれば、曰く、是よりも尚およき事もあるべし、まして如此事をや慶するに足らずとて喜ばず、凶事ありて人來り弔すれば、曰く、是よりも尚凶き事もあるべし、ましてや如此事をや、憂うるに足らずとて、憂いず。此ましてという字を漢字に直さば況の字なりと、余此話をきゝ(其何書にあるか聞落せしは残念なり。蓋し塞翁の馬作り替話なるべし)、大に面白く感じ、此翁固く安心立命の地に心を置く、故に幸不幸に大差なく、毀誉褒貶意に介するに足らざる也。己れも安心立命の地を堅めてましての翁の真似をしようかと、因て此況(まして)の字を取て況齋と号さんとて、一日岡本氏に其事を話したりしに、氏笑て曰く、余亦此字を取り既に況齋と号せりとて、其蔵書目錄況齋書目という本を示されたり、併し号などというものは、借用証文に書たり、公証人役場へ持出すものでもなし、いくら同じ人がありても差支なきものだから、其儘改めもせず、況齋と号するのだ。漸く年齢を重ね、こうらを経て来て、近年は、齋をやめて翁をし、況翁と号す。併し安心立命の地盤堅固にして果して昔のましての翁の如く参るか参らぬかは、死して後ならでは確とはならぬ。

岡本縫助は岡本保孝(一七九七〜一八七八)のこと。通称は初め勘右衛門、字は子戒、号に況齋<sup>(29)</sup>や麻志天乃屋(ましてのや)、拙誠堂など。旗本若林家に生まれ、のち岡本家を継ぐ。国学を清水浜臣に、漢学を狩谷

掖齋に学んだ。維新後は大学中博士となった。和漢の学に通し、多くの考証学の著書をもした人物である<sup>(30)</sup>。  
石黒の況翁という号はこの岡本況齋に倣ったものであった。「ましての翁」の話は、石黒が推測するように「塞翁が馬」の一変形であろう。岡本の次男である桜井友二郎は「そもそもこのましてといふ事は、中むかし近江の国にひとりのおきなありて、みることきくことにつけて、つねにましてとなんいひたりけるとかや」と由来を語っている<sup>(31)</sup>。

石黒況翁の高橋九郎宛書簡が多く遺されている。明治二十七年（一八九四）五月三十日付のものを、石黒の自伝と併せて読み解いてみたい<sup>(32)</sup>。

〔封筒〕

（表） 市内日本橋区本銀町三丁目

樋口屋金蔵方

代議士高橋九郎殿

御直披

（裏）

牛込揚場町十七

石黒忠恵

日々御多用奉拝察候、然者鉄道之事も略示きまり候ニ付而者、此後之事ニ付、御高見も承度と存居候、明日者小生寸暇なく、明後日者朝より役所ニ罷有候、もしや議院へ御出之前、時も被為有候ハ、陸軍省へ御出被下候へ者、被得拝芝候、是ハ小生方罷出度候へ共、もしや御不在も難計ニ付、一寸伺候、御都合ニより小生方罷出度ト奉存候、高橋様 石黒

明治廿七年五月卅日

この時、石黒は陸軍軍医総監、高橋九郎は衆議院議員であった。書簡は「鉄道之事」について面談の時日を調整しようとするものである。「鉄道之事」とは何か。当該年の石黒の自伝には次の記述がある(33)。

その頃また、私の郷国の北越鉄道敷設につき私どもは度々集会して相談していたのですが、六月三日の日曜に越後十一藩の旧藩主諸君とも相談することがあり、前島密・大倉喜八郎その他の諸氏も共に星岡茶寮に集まり、一応話も終り午食をしようというところへ、陸軍省から急報で、即刻陸軍大臣官邸へ来いと的命令です。

石黒は北越鉄道（現在の信越本線直江津―新潟間）の敷設を目指して尽力していた。六月三日には山王の星ヶ岡茶寮で、旧越後十一藩（長岡、村上、高田、糸魚川、新発田、村松、与板、三根山、三日市、黒川、椎谷）の藩主らを交えた会合を催している。同席の前島密（一八三五―一九一九）は越後国頸城郡下池部村（現上越市）の豪農の出で、医学、蘭学、航海術を修めたのち、幕臣となった人傑。明治政府の郵便制度を創設したこと知

られる。大倉喜八郎（一八三七～一九二八）は越後国北蒲原郡新発田町（現新発田市）の豪商の家に生まれ、若くして江戸に出て商売に成功。明治政府の武器御用達商人を務めるとともに、様々な会社を立ち上げ一代で大倉財閥を築き上げた。

新潟県出身の人士を集めたこの会合に高橋九郎が出席したか否かは定かでない。この前日、六月二日に衆議院は解散している。九郎は同年三月一日におこなわれた第三回衆議院議員総選挙に、新潟五区より出馬し初当選した。議員たちが召集され第六議会が開会したのは五月十五日。九郎の最初の衆議院議員としての実質的な活動期間はわずかに十八日間であった。九郎が再び帝国議会に戻ってくるのは明治三十一年のことである。

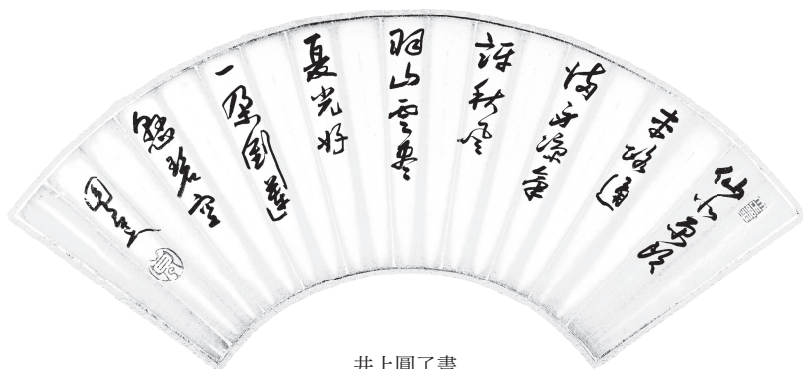
石黒についてもこのあと北越鉄道事業から一歩引かざるを得なかった。六月三日の会合途中での急報は、朝鮮半島への清国出兵に対する協議のため、翌四日に石黒は野戦衛生長官となり、日清両国は戦争へと突入してゆく。

鉄道の方は、同年七月二十六日に逋信省より北越鉄道株式会社（發起人代表渋沢栄一）に対して鉄道敷設の仮免状が下付され、実現に向けて動き出している<sup>34</sup>。創立委員長には前島密が就任した<sup>35</sup>。

#### 四

明治三十九年（一九〇六）、井上圓了は大学経営から身を退き、社会教育活動としての全国巡講をはじめた。以後、大正八年（一九一九）まで、講演回数およそ五四〇〇回、聴衆人数は延べ一四〇万人にのぼる<sup>36</sup>。巡講の詳細な記録を、圓了は『南船北馬集』として出版した。そこには各地を訪れ、感興の湧くがままに漢詩を即座に賦す圓了の姿がある。高橋家に伝わった圓了の書も、そうした全国巡講のなかで生まれた七言絶句を扇に書い





井上圓了書

たものである(37)。

仙北原頭車路通

仙北の原頭に車路通ず

満身涼氣訝秋風

満身の涼気 秋風かと訝しむ

羽山雲尽夏光好

羽山に雲尽きて 夏光や好し

一朵倒蓮懸碧空

一朵の倒蓮 碧空に懸かる

圓了道人

上平一東の韻。関防印は「大正四年」(白文)。落款印は「圓了」(朱文)を象った橢円変形印。圓了の関防印はその年を刻むため毎年更新される。大正四年の圓了は、伊豆修善寺に新年を迎えたのち、まず二月より五月にかけて岡山を隅々まで巡講。三浦半島に疲れを癒やしたのち、六月より秋田の巡講に入る。八月に秋田全域の巡講を終え、九月末の帰郷の往き帰りに長野、新潟、福井を巡講。十二月に栃木県を巡って、この年を終える予定が、郷里の弟井上圓成危篤の報をうけ急ぎ帰郷。幸い一命を取り留め安堵するも、かえって圓了が風邪を引き、そのまま帰京。風邪は翌年まで持ち越している(なお圓成は大正五年の二月一日に入寂)。

この年、各地で詠んだ漢詩は八十六首。実際の景色に即した詩がほとん

どだが、まれに絵葉書や案内記のみから一詩を得ていることもある。掲出の詩は七月三十日、秋田県南部、矢島町への巡講の途次に詠まれたものである<sup>(38)</sup>。起句はもと「矢島溪頭車路通」となっていたが、より広汎な地域を指す「仙北」へと推敲された。高原の爽やかな風と光を詠み、鳥海山を逆しにした蓮に見立てている。

高橋九郎にこれを書し、贈ったのは九月三十日のことであつたと思われる。両親の法要を営むため、圓了はこの日の午後四時に郷里の来迎寺駅に到着した。翌日の早朝より十月五日まで魚沼郡各所を講演して廻り、十月六日の正午に来迎寺駅を発し、福井へ向かっている。この間、来迎寺には一度も戻っていない。九郎と久闊を叙す機会は三十日をおいてない。かりに十月六日の出発前に書したのであれば、圓了はこの数日間に魚沼郡で詠んだ二首を認めたであろう。圓了は秋田で詠んだ三十二首より、気に入りの一首を九郎へ贈った。圓了と九郎、年経りでも変わらぬ同窓の誼が察せられよう。

しかしながら、若き日の圓了には九郎へのわだかまりが存在していた。慈光寺の跡継ぎと檀家総代との確執である。明治二十二年、哲学館はそれまで仮教場としていた本郷龍岡町の麟祥院を出て、蓬萊町の新校舎へ移らんとしていた。哲学館、飛躍の年にあたり、圓了は慈光寺次期住職の座と訣別した。頻りに帰郷を促す父圓悟に対し、圓了は「仏教惣体」のために身を尽くす所存であることを書き送った<sup>(39)</sup>。それは「田舎ノ一寺院ノコト位ハ之ヲ二、三年其儘ニ打捨テ置クモ別段仏教上ニ困難ヲ来ス程ノコト無之」という態度をとらせるものとなる。ことは父親との関係だけではない。檀家との問題でもある。

若シ慈光寺檀中、慈光寺ヲ思フノ本意、仏教ヲ愛スルノ意ニ出ツルナラハ、何ソ私カ今日仏教全体ノ為メニ苦心奔走スルヲ尤ムルノ理アラシヤ、亦何程其檀中一同カ私ニ迫リテ之ヲ尤ムルモ、私カ自分ノ赤心ハ天地

ニ誓フテ変スルコト不出来候、縦令檀家一同我レヲ暗殺スルトモ、我身ヲ寸断スルトモ、余ハ自分ノ盟心ハ日月ヲ貫キテモ変スルコト不致候、蓋シ檀家カ一ヶ寺ノ盛衰ヲ見テ、仏教全体ノ今日ノ有様ヲ洞察スルノ力ナキハ、其識見ノ暗キニヨルコト明カニ候、私ハ仏教ノ為メニ一命ヲ損スルカ如キハ末代ノ榮譽ト致ス所ニ候、私ノ赤心ハ田舎ノ人ニ説キテモ兎テモ不相分候ニ付、是迄申シタルコト無之候、高九氏其他ノ諸氏上京アリテモ世間普通ノ談話ノミ致居候ハ、私之本心ハ御話致シテモ御分リ無之ト存候故、人並ニ交際致居候、世間ノ人ニ此ノ如キコト話シ致テモ、人ハ狂人ノ様ニノミ思ヒ居候、然シ夫レハ私カ狂人ナルヤ、世間ノ人ノ方狂人ヤ、判定スルコト難キコトニ候、古代ニアリテ一宗オモ開キタル人ハ其当時ノ人ヨリ見ルトキハ皆狂人ニ候、其孰レカ果シテ狂ナルヤハ死後ノ人ヲ待チテ始メテ知ルヘキコトニ候、慈光寺檀中狂スルカ、私狂スルカ、唯今ニテハ不分候ヘ共、未来ノ人其判別ヲ知ルコトニ候、

圓了若き日の氣負いが感じられる激しい文章である。文中の「高九氏」とは高橋九郎にほかならない。九郎ら檀家も圓了の帰郷を慫慂していた。だが圓了には高邁な理想がある。「仏教今將ニ死ナントスル」、その秋に臨んで「狂人」圓了は自らを死地に置いての奮闘を誓った。圓了の帰郷を願った九郎も、のちにはその活動に多額の寄付金を寄せることとなる。

圓了生家の慈光寺に、晩年の圓了が九郎に宛てた書簡が遺されている。伝来経緯は不詳だが、後年に高橋家から慈光寺に寄贈されたものと思われる<sup>(40)</sup>。

七月廿五日

拝啓、入暑以来益御壮健奉賀上候、拙者ハ五月以来朝鮮十三道巡講罷在、一昨々日帰京、更ニ本日ヨリ青森県へ向ケ出講仕候、慈光寺ニテハ以御蔭成章目出度真宗大学卒業候ニ付、尚今後宜ク御引立被下度候、朝鮮釜山ニテハ小倉良八氏ヨリ伝言有之候、無筆ノ為ニ御書面ハ差上不申候へ共、一日モ御忘レ申シタル事無之候ニ付、朝鮮へ御渡航ノ節ハ御立寄被下度、呉々申サレ候、当氏ハ釜山成功者ノ一人ニ候、先ツハ右御通知旁暑中御見舞申候、拙者ハ九月十日頃ニハ帰京可仕候ニ付、其節委細可申上候、

高橋大人 井上圓了拝

大正七年（一九一八）の圓了は、五月から日本統治下の韓国を講演して廻っている。書簡にある十三道とは明治二十九年から実施された李氏朝鮮（のち大韓帝国）の地方行政区画のことで、ここでは朝鮮全土の意で使われている。七月二十二日に東京に戻った圓了であるが、この書簡を認めた二十五日に早くも次の巡講先である青森へと発っている。

釜山では小倉良八なる人物より高橋九郎への言伝を頼まれている。「釜山成功者」の小倉は九郎に恩義があるのであろう。渡航の際には立ち寄るよう頻りに勧めたという。

書中の成章は圓了の甥で、弟圓成の子<sup>41</sup>。この年、真宗大学（現大谷大学）を卒業した。成章は圓成入寂後の慈光寺十六世である。圓了にしてみれば、弟圓成は自らの代わりとなって慈光寺を継いだ。そのことは甥の成章の人生をも変えたことになる。圓了は檀家惣代の九郎へ、成章の支援を頼まずにはいられなかった筈である。

圓了は翌大正八年六月六日に遊説先の大連で倒れ、不帰の客となった。享年六十二。況翁石黒忠憲は、生前、

自らの葬儀における遺文の代読を圓了に頼んでいたが、それは叶わなかった<sup>(42)</sup>。圓了の辞世は既に公開済みである<sup>(43)</sup>。

世事由来幾變更

世事 由来は 幾變更

老餘只喜会昇平

老餘 ただ昇平に会するを喜ぶ

非僧非俗心常穩

僧に非ず俗に非ず 心常に穩やかにして

無位無官身自輕

位なし官なし 身おのずから輕し

淡以相親何忒友

淡きを以て相親しむ なんぞ友を扱ばん

斃而後已不期成

斃れて而してのち已む 成るを期せず

吾生幸得全天寿

吾が生 幸いにして 全き天寿を得る

笑向黄泉深处行

笑いて向かわん 黄泉への深处の行

「非僧非俗」は親鸞の言葉として知られる（『教行信証』。真宗寺院に生まれ育った圓了にこの言葉は馴染み深かったであろう。また圓了には、叙勲の話も一度ならず出ているが、これを固辞し「無位無官」をとおした<sup>(44)</sup>。圓了遺愛の落款印のひとつは次のように刻まれている。「無官無位非僧非俗 妖怪道人圓了」。

# 【註】

(1) 井上圓了『日本周遊奇談』（明治四十四年、『井上円了選集』二十四卷）四四九頁。

- (2) 井上圓了『圓了茶話』(明治三十五年、『井上円了選集』二十四卷)一五八頁。
- (3) 三輪政一編『井上圓了先生』(東洋大学校友会、一九一九年)一〇三頁。また「言文一致」の漢詩とも評されている(同前書、一七六頁)。
- (4) 井上圓了「哲学館開設ノ旨趣」(明治二十年、『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上)八三頁。
- (5) 井上圓了『活佛教』(大正元年、『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上)一〇頁。
- (6) 井上圓了『屈蟠詩集』(『雨水井上円了漢詩集』三文舎、二〇〇八年)三三四頁。
- (7) 高橋家文書の大部分が二〇一〇年に東洋大学井上円了記念博物館に寄贈された。その整理と研究のために井上円了記念研究助成をうけた「近世・近代の地域社会と名望家」研究会(研究代表者・白川部達夫)が組織され、筆者も分担研究者として名を連ねている。研究会では、これまでに二冊の年次報告書を刊行しており、これに高橋家についての研究論文や高橋家文書の仮目録を収めている。参照されたい。
- (8) 武藤喜一編『高橋九郎翁』(産業組合中央会新潟支会、一九二四年)三頁。
- (9) 石黒忠恵『懷旧九十年』(岩波文庫)八六頁。
- (10) 高橋家文書(神谷区蔵)二二二番。
- (11) 吉田棟斎『越後人物史』(弘化二年、『新潟県史』別編三)一四七頁。恒の読みは不明。諸橋轍次『大漢和辞典』によれば名乗はチカ、ツネ、ノブのいずれか。
- (12) 以下、煩雑を避け、鈍叟と名乗る以前であってもそれで通す。石黒況翁についても同じ。
- (13) 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』上(吉川弘文館、一九六九年)四三四頁。
- (14) 今泉鐸次郎『河井継之助傳』(博文館、一九〇九年)十五頁。
- (15) 井上圓了『襲常詩稿』(『雨水井上円了漢詩集』前掲)二六頁。
- (16) 井上圓了『襲常詩稿』(前掲)五〇頁。
- (17) 井上円了研究センター蔵。紙本軸装。
- (18) 唐木順三『無用者の系譜』(筑摩書房、一九六四年)。
- (19) 小川環樹・山本和義選訳『蘇東坡詩選』(岩波文庫)三一八頁。なお「眇」と「渺」の違いがあるが、『五體字類』

によれば同字である。

- (20) 高橋家文書（井上円了記念博物館蔵）。  
(21) 前野直彬注解『唐詩選』上（岩波文庫）三七六頁。  
(22) 松浦友久編訳『李白詩選』（岩波文庫）九四頁。  
(23) 高橋家文書（神谷区蔵）二二〇番。  
(24) 石黒は、別に茶人としての顔も持っている。『好求録 茶器鑑定秘伝抄』（明治十六年、赤塚輯校閲）、『増訂好求録 茶器鑑定法』（明治四十四年）を出版していることはあまり知られていない。  
(25) 石黒忠恵『懷旧九十年』（岩波文庫）九二頁。圓了の死に際して寄せた一文にもこのことが書かれている（『井上圓了先生』前掲、八五頁）。  
(26) 井上円了研究センター蔵。純本軸装。  
(27) 諸橋轍次『大漢和辞典』一卷、一八六頁。  
(28) 『況翁閑話』（博文館、一九〇一年、国立国会図書館デジタルライブラリー）。  
(29) 諸橋轍次『大漢和辞典』は、「況」は「況」の俗字であるとする。石黒は専ら「況」の字を用いている。  
(30) なお森鷗外『渋江抽斎』（岩波文庫）六七頁にも登場する。  
(31) 山部和喜「況斎と『発心集』」（『三田國文』二十一号、一九九四年）。  
(32) 高橋家文書（井上円了記念博物館蔵）。  
(33) 石黒忠恵『懷旧九十年』（岩波文庫）二九三頁。  
(34) 明治二十七年八月十五日付『官報』（国立国会図書館デジタルコレクション）。『渋沢栄一伝記資料』九卷（渋沢栄一伝記資料刊行会、一九五六年）一七頁以下。  
(35) 『前島密―前島密自叙伝』（日本図書センター、一九九七年）一六一頁以下（市島謙吉「後半生録」）。  
(36) 高木宏夫・三浦節夫『井上円了の教育理念』改訂十三版（東洋大学、二〇一〇年）一五四頁。  
(37) 井上円了研究センター蔵。扇面額装。  
(38) 井上圓了『南船北馬集』第十一編（大正四年、『井上円了選集』十四卷）三三九頁。

- (39) 井上圓悟宛井上圓了書簡（慈光寺藏、『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上）五〇頁。
- (40) 井上円了記念博物館のポジフィルムを閲覧した。
- (41) 三浦節夫「井上円了とその家族」（『井上円了センター年報』十五号、二〇〇六年）。
- (42) 『井上圓了先生』（前掲）八九頁。
- (43) 井上圓了『日本周遊奇談』（明治四十四年、『井上円了選集』二十四卷）。二首詠まれている内のひとつ。
- (44) 井上圓了『南船北馬集』十二編（大正五年、『井上円了選集』十四卷）三九九頁。『井上圓了先生』（前掲）一七三頁、二〇〇頁。

〔付記〕 本稿掲載の写真はいずれも井上円了記念博物館の北田建二学芸員に撮影していただいた。このほか氏には種々ご教示賜った。また上越市立総合博物館の荒川将学芸員にも有益な情報を賜った。記してお礼申し上げる次第である。なお本稿は井上円了記念研究助成「近世・近代の地域社会と名望家」による研究成果の一部である。